

中国歴史班 A

雲南南部地域の開発と環境変遷—石屏地域を中心に—
野本 敬 (学習院大学人文科学研究科史学専攻)

キーワード: 開発、人口変動、石碑

調査期間・場所: 2004年12月22日～2005年1月10日 中国雲南省紅河哈尼族彝族自治州、2005年2月
20日～3月14日 中国雲南省文山州

A Note on Exploitation and Environmental transition of South Yunnan; with a central focus on the Shiping district

NOMOTO Takashi

(Gakushuin University Graduate School of Humanities Doctoral Course in History)

Keywords : Exploitation, Population Movement, Stone Inscriptions

Research Period and Site : 2004, December 22-2005, January 10, in Honghe Hani and Yi Nationality
Autonomous County, Yunnan, China 2005, February 20-March 14, in Wenshan County, Yunnan, China

要旨: 本稿では雲南南部地域の開発の進展とそれをもたらした環境変遷について、石屏地域を事例に取り上げ考察する。開発の飽和状態に伴う人口圧力の結果、周辺地域へ経済的・社会的な側面のみならず活動の結果として周辺地域の環境変遷に至るまで多大な影響を与えたことを指摘し、一地域の開発進展の様相から更に広い意味での環境変遷を照射しうる視角を提示する。併せて従来用いられてきた史料に加え、現地調査で得られた成果の活用により、更に具体的な実態を把握しうる可能性を指摘する。

はじめに

今回事例に取り上げる石屏県は雲南省南部、現在の紅河哈尼族彝族自治県の西北部に位置する。現在の行政区域は北緯23度19分～24度06分、東経102度08分～102度43分間に在り、その区域は南北88km、東西59kmを有し、総面積は3037km²である。そのうち平地は162.3km²、山地が2874.7km²と大部分は山地が占めている。[石屏県志編纂委員会1990:44,52]

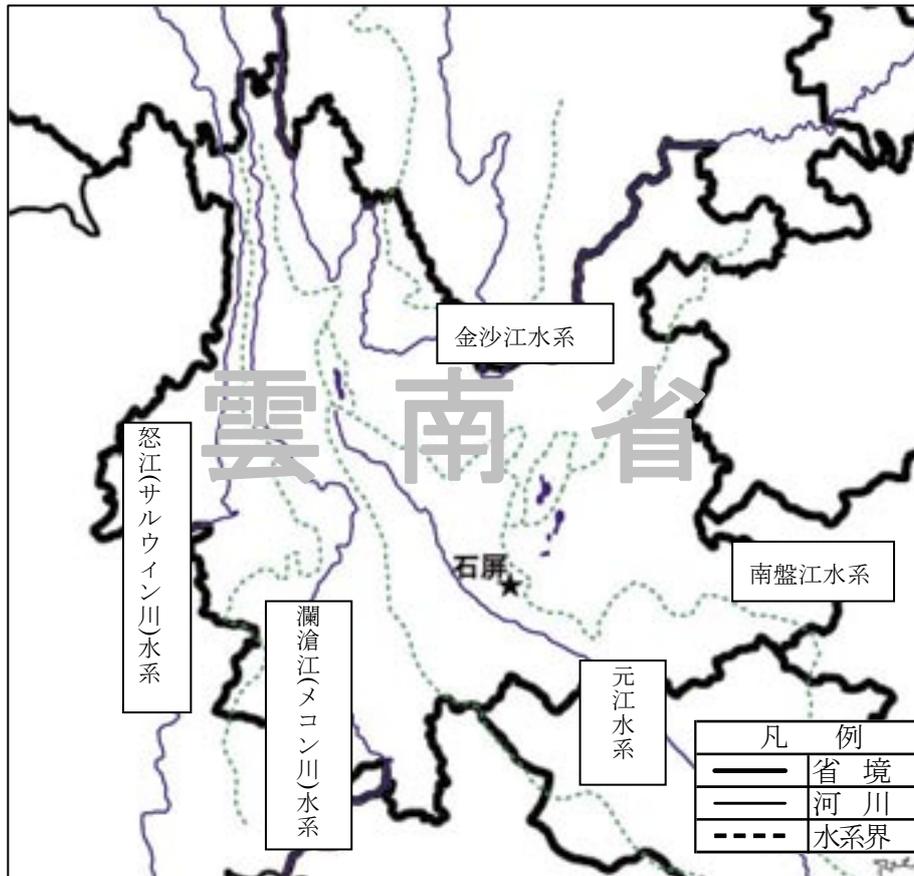
水系の面から見れば、広義の元江水系の東北辺に位置すると同時に、広州より南シナ海に至る珠江に注ぐ南盤江の源流でもあり、元江・珠江両水系の交差する位置にあたる。(図1参照)

また地形面をみれば北部・西部・中部・東部の主要山脈では海拔2000mを越えるが、東南部の低地では海拔は259m程度であり、高度による気候の変化が激しい。全般的には気候区分では高原亜熱帯山地気候区に属し、典型的なモンスーン気候であって四季を通じて比較的温暖な気候といえることができる。

その他自然環境の面からは2つの湖、5つの主要河川をはじめ水資源に比較的恵まれていると言え、特に盆地では農・牧・林・漁業に好条件を提供している。[石屏県志編纂委員会1990:P44,52]

但し前述したとおり土地面積の大半(94.65%)は山地であり、平地はごく一部(5.35%)にとどまり[石屏県志編纂委員会1990:55]、そのため実際には農耕に適した土地は決して多いとはいえない。かつ鉱産資源など工業発展に繋がる資源はけっして豊富とはいえないという石屏地域の特性は、当該地域における経済発展をおのずと規制することとなり、後述するようにそのことこそが石屏地域を起点に周辺地域を巻き込むかたちで政治・経済・社会・自然環境を含めたドラスティックな変化をもたらす一因となったと考えられる。

図 1・雲南省主要水系図



1. 移住と定着

さて石屏の歴史を振り返ってみると、この地域が具体的に史書の記載に登場するのは 8 世紀前半・唐代にまで遡るが、実質的に中国中央王朝の領域に入るのは 13 世紀・元朝時代、かつ本格的な開発の開始は 1382 年、明朝の直轄支配編入以降と言える。[石屏県志編纂委員会 1990：44] 元来石屏地区は彝族をはじめとする非漢族が多数を占めている地域であったが、これ以降長江下流域より漢族を主とした大量の入植が開始され、従来の生産構造や人口構成は一変することとなった。

14 世紀以降雲南に入植した移民たちは屯田兵として石屏に定着し、各姓毎に村落を形成し、祠堂を設立していく。同時に石屏地域における水利工事や開拓事業も進められた。こうした状況は従来史書からだけでは具体的な様相までは分り難かったが、今日残る石碑などから更に具体的な実態への接近が可能となる。現在の石屏県寶秀鎮蘭梓營小学校内に保管されている「石屏州土主廟碑」(乾隆 41(1776) 年立碑) の記載によれば移住の歴史と経緯を説明し、併せて立碑当時の土地・水の分配についての取り決めを記載している。こうした具体的な経緯の記載は文献資料からだけでは容易には解明できないところで、フィールド調査の知見が大きく寄与するところであろう。



当該碑拓本写真

さらに開発を進める一方で環境保護の認識があったことは各地に散在する封山育林碑で窺い知ることができる。かつては石屏県の村・池・堤防傍の水源林や保護林は全て村落もしくは宗族によって管理されており、地域の取り決めを石碑として記録し、違反者は規定に従い処罰されることとなっていたという。[石屏県志編纂委員会 1990：139] 事実今回の調査だけでも 2 点を確認することができた。他地域を含めればその点数は更に増加

する。また資料の記載に拠れば既に17世紀、清朝時期から植林も行われていたという。[石屏県志編纂委員会1990:143]

こうした環境保護の認識は自らを取り巻く環境の持続的利用を主眼においたものと理解でき、その意味では明清期に頻発した洪水対策をはじめとする水利事業もその一環にかぞえることができるであろう。事実石屏はじめ雲南南部には水利関係の石碑が数多く残されており、往時の人々の自然への関わりを窺うことができる。詳細は立石報告を参照されたい。

2. 「窮走夷方、急走廠」

ここに挙げたのは雲南に伝わる諺のひとつであり、「貧しくなれば異民族地区へ行き、切羽詰まれば鉱山働きに出る」という意味である。往時、雲南漢人にとって手っ取り早く稼ぐには夷方(主として雲南南部から西部に広がるタイ系民族居住地からビルマ領内)に出稼ぎにゆくのが良いとされていた。そこでの代表的な生業は鉱山労働(走廠)或いは馬・驢馬による隊商(馬幫)を組んだ行商及び運搬業(走夷方)であった。[川野2005:221-222]これらの経済活動は決して零細な外地労働の規模に止まるものではなく、現地の社会・経済・環境までも大きく変えるインパクトを与えるものであった。石屏で見られる事例はまさにその典型であり、以下にその具体的な状況を見ていくこととしよう。

雲南省全体の人口増加の動向は2つの画期を有する。1つは14世紀以降の明朝による政治的入植であり、もう一つは18世紀以降、中国全土で起こった人口爆発に伴う人口増加及び経済移民の流入である。数量的にみれば、16～17世紀を通じて微増傾向であった人口が、18世紀半ばから急カーブを描いて上昇していくことがわかる。この数値の急上昇はひとつには当時の税制改革による統計範疇の変化によるものであるが、この時期に“王朝側が把握できる人口”が爆発的に増加したことをも示している。石屏地域においてもそれは同様で、明代より清代、そして清末～民国初頭時期にかけて顕著な人口増が認められ、明清時代を通じた雲南省全体の動向と一致した傾向を見せている。(図2、図3参照)

しかしながらその人口を支えるべき耕地面積は人口の爆発的増加の始まる18世紀以前の時点で既に飽和状態に達しつつあった。図4*より清朝康熙年間以前の段階で既に耕地面積はそれ以降の時代と同等程度まで開発されていたことが明確に理解できよう。しかし上記図2、3で示したとおり、一定の耕地面積からの生産量によって支えるべき人口は急速に増加しており、石屏の住民に必然的に外地での出稼ぎを余儀なくされる結果となった。

実際民国年間に編纂された「石屏縣志」ではその事情を以下のように端的に伝えている。

…吾が石屏は地は瘠せ民は貧しく、生計を立てることは容易ではない。明代は人口も希少であり(まだ生計を立てることも)容易であったが、清代以降は人口が激増し、周囲に生計を求めざるを得なくなった。故に元江より墨江・普洱・思茅・茶山に至る一帯は石屏の殖民地となっている。石屏の民は冒険心に富み、大事業を好む。…(民国『石屏縣志』巻六、風土)

その結果石屏地域では生活のため外地に出て商業に従事する傾向が顕著となった。その状況を文献資料では以下のように記述している。

…石屏商業は思茅・普洱一帯が最大であって…元江・他郎・威遠・緬甯・磨黒・通関・六順・十三版纳・五大茶山、遠くは緬甸まで及び、班洪芦蘆国境の吳尚賢の茂隆廠の如きはその最たるものである…(民国『石屏縣志』、同)

…石屏商人は勤儉で誠実であり、国境数千里にわたり、現地民はよろこんでこれと交易する。現地語を解する者には現地で結婚する者もある。故に雲南南部一帯で俗に「人煙あるところ必ず石屏人有り」という。…(民国『石屏縣志』、同)

3. 会館設置

こうした石屏からの人の流れは東方(箇舊・蒙自・昆明など)及び西方(元江・墨江・普洱・思茅・易武など

* 史料上の矛盾により分析対象としたものは「民」田地のみで「軍」屯田地等含まれていない要素があることをお断りしておく。

図2 雲南全省人口変動

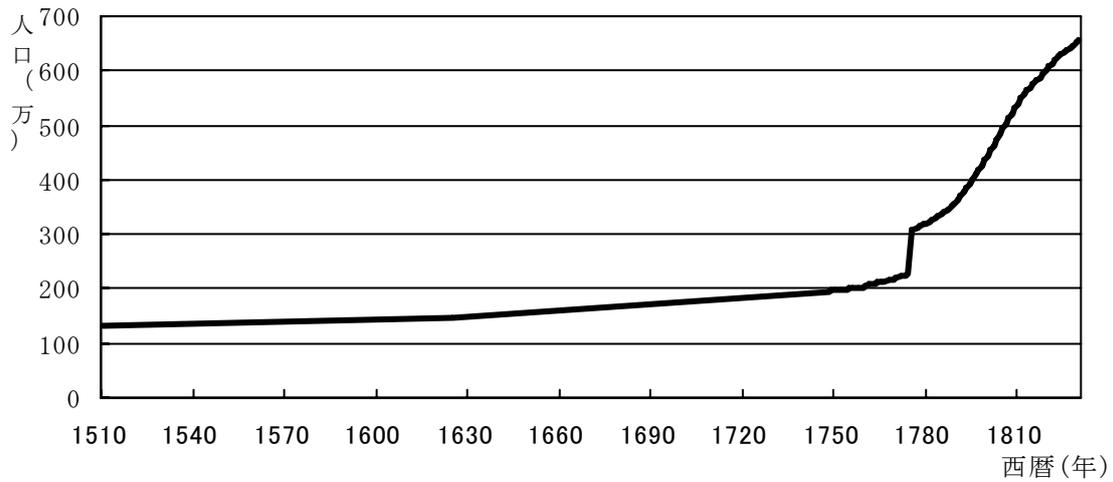
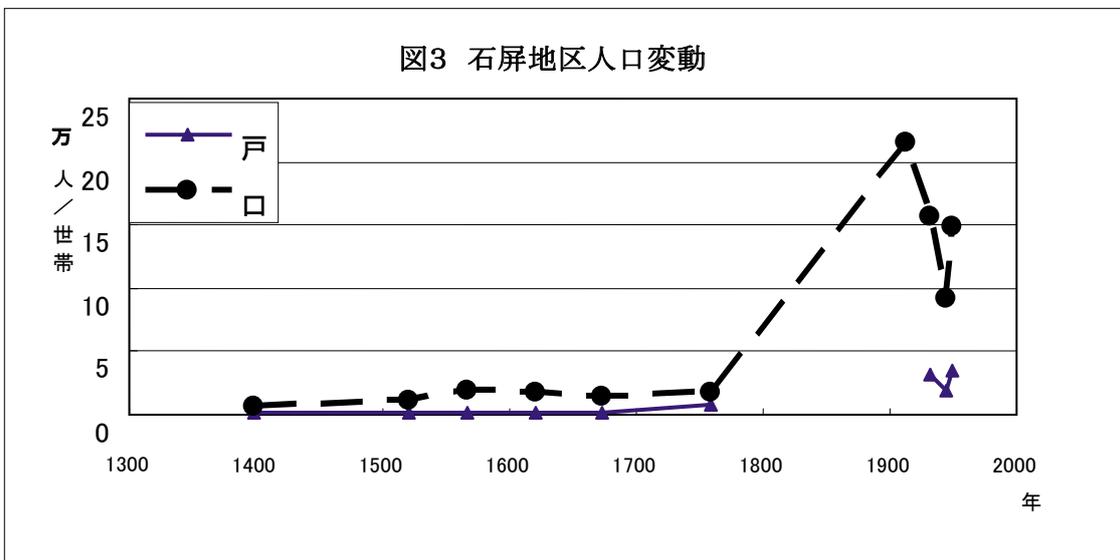


図3 石屏地区人口変動



([石屏県志編纂委員会 1990 : P675~676] 及び康熙・乾隆・民国『石屏州(縣)志』より作成)

)に大別できるが、いずれにおいてもある地において幾人かが度々往復するうちにその地において住居を設け定住する者が現れ、次第に定住する同郷者が増加すると便宜のために同郷会が組織されるようになった。同郷会は特に規定などはなく、有事の際に集まって協議すること以外に特に定まった活動も持たなかった。やがて同郷会はこうした現地における同郷者の集会所兼立ち寄りの場として資金を集め、各地に「石屏会館」を設立していく。[石屏県志編纂委員会 1990 : 448] 文献資料の記載によれば

…省城、思茅、蒙自、箇舊、元江、普洱、他郎、磨黒、雅口、茶山各々会館を有す。…(民国『石屏縣志』、同)

とあるとおり、各地に存在していたことがわかる。うちいくつかはまだ現存しており、増田報告にもあるとおり昆明翠湖畔のそれが著名である。

こうした同郷会／会館組織は石屏のみならず江西・湖広など他の地域からの商人も同様であり、時に現地で協同して活動することもあったようである。普洱地区における未将来資料のなかにはそうした活動を示すものが含まれており、従来文献資料で明確にならなかった部分が石碑資料によって今後実態が解明される可能性を示していると言えよう。

ではこうした彼らの活動はいかなるものであって、それはどのような影響を周辺に与えたのであろうか。

4. 石屏茶幫

彼らの活動のうちで有名なものの一つは茶葉の交易であり、後世俗に「石屏茶幫」と称される。清代中期以降、石屏の商人は易武・普洱・思茅などの地で茶交易を行い、茶葉の加工後昆明などへ輸送し販売をおこなった。[石屏県志編纂委員会 1990：283] ふつう手順としては勐海・易武で茶の買い付けを行い、馬幫によって思茅に輸送した後加工を行い、さらに昆明、或いは大理地区下関を経由してさらに外地へと販売されていくルートをとった。省外に販売される際はこれらの茶は「普洱茶」と呼ばれ、彼らの活動は北はチベット、西はビルマ、東は昆明に至る茶交易の中樞を担っていたということができよう。[木 2004：100] 彼らの活動は単なる茶交易に止まらず現地社会を中国の貨幣経済・市場経済に組み込む作用を為した。既に 18 世紀時点で漢族商人による経済的規制は現地民に強い影響を与えており、更に 19 世紀には漢族商人が茶葉の生産をより強く管理するようになったと考えられる。[ダニエルズ 2004] このことは必然的に現地の社会（従来のタイ系土司と清朝及び漢族商人の私的活動）・経済（茶交易を介する貨幣経済の浸透、資金貸付）関係に多大な影響を及ぼすものであり、ひいては外部による生産管理を通じた生産環境、すなわち現地の生態環境にまで影響するものとなったことは容易に予想できよう。

5. 鉦山開発

また西方、思茅・普洱地区での茶交易と並び、著名な石屏出身者の活動は鉦産資源開発である。近代錫の生産で注目をあびることとなった箇舊鉦山もその契機は石屏出身者の開鑿であった。また後述する茂隆銀山の事例は非常に有名である。そのほかにも塩井の開鑿ほか多岐にわたる資源開発に従事した。[木 2004：29]

鉦山開発で最も著名な人物は 18 世紀前半に活躍した石屏宝秀鎮出身の呉尚賢である。彼は石屏より班洪（現在の臨源佤族自治县）に出奔し、現地の異民族首長と契約を交わして鉦山開発に着手した。その結果 4 年にして鉦洞 200 余、鉦夫 3 万余、銀の年間生産量 10 万余両という一大拠点を作り出した。しかも単純な鉦山開発に止まらず、清朝にも異民族社会にも属さない、その数数十万とも称される規模の一種の独立共同体を組織した点が注目されよう。[方 2003：977][石屏県志編纂委員会 1990：735] 後これを危険視した清朝により呉は処刑されるが、辺境地帯に成立した独自の社会形態の一つのパターンとして興味深いものがある。

しかし鉦山開発は一方で植生をはじめとした周囲の生態環境に多大な負担をかけるものでもあった。鉦石の精製は必然的に大量の燃料を必要とするが、その燃料にはしばしば入手のもっとも容易な山林の木材が使用されたであろう。その結果文献資料中に「童山（はげ山）」という記述が特に道光年間以降よく見られるようになっていく。これまでこうした自然環境という観点からの鉦山開発の影響は必ずしも十分に着目されてきたとは言えず、今後ミクロの視点とあわせた実態の解明が求められている。

ここに石屏という一つの地区の開発進展を通じ、社会・経済関係という人文的要因から生じた影響が他地域の生態変遷に波及するという、生態史を考察するうえで極めて興味深い視角を確認することができる。

おわりに

以上で確認できたように、石屏からの出稼ぎ活動は地域の政治的・社会的及び経済的変動を引き起こしたばかりでなく、必然的に外部の生産構造、ひいては自然環境の人為的改変にも大いに影響を及ぼすものとなった。このように石屏地区という特定地域の開発から他の雲南南部諸地域の環境変遷に影響が波及していく様相を確認することができるのであり、地域生態史に及ぼす人間活動の要素を考察する際極めて重要な示唆を与えることが理解できよう。

【参考文献】

(日本語)

川野明正 2005 『中国の〈憑きもの〉 華南地方の蠱毒と呪術的伝承』 風響社

ダニエルス, クリスチャン 2004 「雍正七年清朝によるシプソンパンナー王国の直轄地化についてータイ系民族王国を揺るがす山地民に関する一考察ー」 『東洋史研究』 62-4:92-128

(中国語)

方国瑜 1934 『滇西辺区考察記』 国立雲南大学西南文化研究室

方樹梅 (纂) 2003 『滇南碑伝集』 雲南民族出版社

木基元 2004 『石屏史話』 雲南人民出版社

石屏県志編纂委員会 1990 『石屏県志』 雲南人民出版社

Synopsis: This paper examines the exploitation of South Yunnan and the concurrent environmental transition of southern Yunnan through a case study of the Shiping area. The population pressure that accompanied development reaching saturation level exerted a great influence on the environment as well as the society and economy of the surrounding areas. Research of the development of particular area, can throw light on the broader aspects of environmental transition. Moreover, the use of materials gathered through field surveys can aid us in getting a more accurate picture of the changes that took place.